

ベラルーシのナショナル・シンボル —白赤白旗と紋章パホーニャの概要—

清沢紫織

1. 白赤白旗と紋章パホーニャのルーツ

2020 年は、ベラルーシの歴史にとってとりわけ象徴的な年となったといえるだろう。1994 年から 26 年の長きにわたり政権の座にあったアレクサンドル・ルカシェンコ（アリャクサンドル・ルカシェンカ）氏の大統領選挙での不正疑惑、そしてそれに抗議する市民への政権側の暴力的な弾圧は、多くのベラルーシ国民から反感を買いかつてない規模で全国的な抗議活動が巻き起こっている。現地からの報道では、人々がベラルーシ・ナショナリズムの伝統的なシンボルである白地に赤い横帯を配した白赤白旗とパホーニャ（пагоня）と呼ばれる馬上の騎士の紋章を団結のシンボルとして掲げ、通りや広場で「Жыве Беларусь!（ジヴェ・ベラルーシ）」（ベラルーシ万歳！/ベラルーシよ永遠に！）とシュプレヒコールを上げる様子が連日のように伝えられている。

ベラルーシの社会情勢を長年研究している服部倫卓氏が著書『不思議の国ベラルーシ』（岩波書店、2004 年、18－19 頁）で紹介しているように、この白赤白旗と紋章パホーニャは、ベラルーシ共和国が 1991 年に独立国となった際に国旗及び国章として採用したものであり、歴史的には 1918 年に独立を宣言したベラルーシ人民共和国（Беларуская народная рэспубліка）が史上初めて「ベラルーシの」国旗国章として正式採用したものである。この 2 つのシンボルの間には一定のつながりがあり、白赤白旗の 2 色の色は、パホーニャの紋章で背景となっている赤い盾とそこに描かれる白馬からとられたものである。

よく知られているようにパホーニャの紋章は、隣国リトアニア共和国ではヴィーティス（Vytis）と呼ばれ現在同国の国章として正式に採用されている。これは、この紋章を現在のリトアニアとベラルーシの両方の領域を主要な版図として中世に栄えたリトアニア大公国が国章として使用していたことをその背景としている。



写真 1：パホーニャを国章としていた 1992 年にベラルーシで発行されたベラルーシ・ルーブル紙幣と現在リトアニアで発行されているユーロ貨幣（筆者撮影）

2. パホーニャ (пагоня) とは何か

パホーニャ (пагоня) とは、その字義通りには「(逃げる者を) 追うこと、追撃すること」を意味する。ベラルーシ人歴史学者のミハイル・トカチョウ (Міхаіл Аляксандравіч Ткачоў) によれば、パホーニャとはスラヴ人が血縁・親縁関係に基づく共同体で暮らしていた頃からの慣習であり、敵からの奇襲によって共同体の仲間が捕虜となった際に武装する権利の有る男性が捕虜となった者を奪還すべく騎馬等で敵を追い撃退する義務を負っていたことをその起源としている。このパホーニャの伝統は、やがてキエフ・ルーシの時代やリトアニア大公国の時代になると、戦の場面において実践されるようになっていった。リトアニア大公兼ポーランド王であったヤハイラ (ヨガイラ、ヤギェウオ) が発布した 1387 年の勅令には、ポラツク地方、ムスチスラヴリ公国、ナヴァフルダク地方、フロドナ地方の住民に対して敵の追撃のための「パホーニャ」を義務として課す旨が記されている。

ベラルーシ地域は東西南北に開かれた交易路の交差点に位置するという地政学的な条件が災いして、古くからモンゴル・タタール軍の侵攻や十字軍の度重なる出征など外部からの絶え間ない攻撃に晒されてきた。こうした中で、パホーニャの伝統はベラルーシを含むリトアニア大公国の領域に広く根付き、やがてそれは祖国防衛の理念を象徴するものとしてリトアニア大公国の国家イデオロギーの基礎となっていった。こうした中、ヨーロッパの紋章学と騎士伝統の影響の下で、パホーニャは国家イデオロギーを体現する図象として描かれるようになり紋章として用いられるようになったのである。

3. 国章としてのパホーニャ

パホーニャが最初に紋章として用いられるようになったのは 13 世紀末、リトアニア大公国の大公や公侯の間であったとされている。フスティニャ年代記 (Густынскі летапіс) には 1278 年にヴィーツェニ公 (ヴィテニス公) がパホーニャを紋章として用いたという記述があるほか、リトアニア・ジェマイティヤ年代記 (Хроніка літоўская і жамоіцкая) にはナリモント公 (ナリマンタス公) の掲げていた紋章がパホーニャであったことが記されている。パホーニャの紋章は、このように最初は個々の公侯によって用いられていたが、ヴィータウト公 (ヴィータウタス公、在位 1401—1430 年) の頃よりリトアニア大公国の国章として用いられるようになった。リトアニア大公国法典 (1566 年の第 2 法典及び 1588 年の第 3 法典) には、全ての郡は紋章パホーニャの入った印章を持つことが義務とされ、軍旗にも必ず用いるべしと記されている。また、紋章パホーニャは市庁舎の塔、街や城の入口門に装飾としてあしらわれ、貨幣にも刻印された。こうした国章パホーニャの使用例として最も有名なのはヴィリニウス旧市街入口にある「夜明けの門」(Вострая Брама) にあしらわれたパホーニャであろう。

「夜明けの門」にもみられるように、国章パホーニャは深紅の盾形に白馬に乗った騎士が描かれる。前述の歴史学者トカチョウは、赤色と白色が用いられることについて、スラヴ人の間で古来より特にこの 2 色が神聖視されてきたことにそのルーツを求めている。



写真 2 : パホーニャの紋章があしらわれたヴィリニュス旧市街の「夜明けの門」(16 世紀初めの建築とされる、筆者撮影)。

4. 白赤白旗のルーツ

16 世紀に入ると、リトアニア大公国の領域では国章パホーニャの色に因んだ軍旗が現れるようになった。こうした軍旗を描写した絵画として知られているのが、ワルシャワ国立美術館に所蔵されている「オルシャの戦い」である。1514 年にオルシャ (現ベラルーシ、ヴィツェプスク州) にてリトアニア大公国軍がロシア軍を破った様子を描いたこの絵では、白地に赤い十字が描かれた軍旗を掲げたリトアニア大公国軍の軍勢が描かれており、ベラルーシ人の中ではこの絵画が白赤白旗のルーツを示すものとしてしばしば引き合いに出される。



写真 3 : 「オルシャの戦い」(ワルシャワ国立美術館デジタルライブラリーより¹⁾)

¹ <http://cyfrowe.mnw.art.pl/dmuseion/docmetadata?id=22739> (2020 年 9 月 13 日閲覧)

ただし、白と赤の2色を用いた旗が現在みられるような白地に赤い横帯を配したものとして現れるようになったのは、20世紀に入りベラルーシ人の民族解放運動が盛んとなってからである。白赤白旗がベラルーシ人の独立や解放のシンボルとして用いられ始めた正確な時期については明らかとなっていないものの、歴史学者のトカチョウによれば、1917年のロシア革命前までにサンクトペテルブルグ、ヴィリニユス、ミンスク等でベラルーシ人の民族解放運動の際に白赤白旗が使用されたという。

現在みられる白赤白旗のデザインを考案した人物として記録があるのは、20世紀初めにサンクトペテルブルグにてベラルーシ人の民族解放運動に関わり後にベラルーシ社会主義会議（グロマダ）にも参加した社会活動家のクラウジー・ドゥジュ＝ドゥシェウスキー（Клаўдзій Дуж-Душэўскі）である。彼は、自身がベラルーシのナショナル・シンボルとしていくつかの旗のデザインを提案し、その中でも白赤白旗が人々に受け入れられたという証言を残している。実際に、彼の提案した白赤白旗は1917年12月にミンスクで開催された第1回全ベラルーシ大会でベラルーシのナショナル・シンボルとして掲げられ、翌1918年に独立を宣言したベラルーシ人民共和国によって正式に国旗として採用された。またベラルーシ人民共和国はパホーニャの紋章も国章として採用した。ベラルーシ人民共和国はその後実質的な国家機構を十分に整備することができないまま、赤軍のミンスク侵攻を受け僅か一年足らずで亡命政権となったものの、白赤白旗とパホーニャの紋章は亡命先においても同政権の国旗国章として使用が継続された。



写真4（左）：リガのベラルーシ人民共和国軍・外交公使館に掲げられた看板（1921年）²

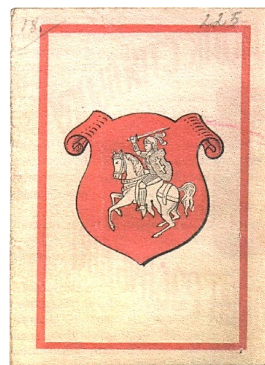


写真5（右）：ベラルーシ人民共和国の旅券（1918-1921年）³

5. 東西分断期、ナチス占領期、戦後期の白赤白旗と紋章パホーニャ

その後、ベラルーシの領域には1919年1月1日にベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国が誕生した。しかし、1920年4月に生じたポーランド・ソヴィエト戦争及び1921年のリガ条約（ポーランド・ソヴィエト戦争の講和条約）を経てベラルーシの領域はポーランドとソヴィエト政権の間で東西に分断されることになった。東部地域はベラルーシ・ソヴィエト

² Цітоў А.К. Геральдыка Беларусі: Ад пачаткаў да канца XX стагоддзя. Мінск. 2010. С.123.

³ Цітоў А.К. Геральдыка Беларусі: Ад пачаткаў да канца XX стагоддзя. Мінск. 2010. С.123.

社会主義共和国としてソヴィエト政権下に置かれ、国章は他のソヴィエト政権の国家と同様の鎌とハンマーを中央に配したものが採用された。また国旗についても、やはり他のソヴィエト政権の国家と同様に赤地に国名の略称を黄色で記したものを国旗として採用した。一方、ポーランド支配下の西ベラルーシでは、ベラルーシ人学校や学生・労働者による政治集会などで、白赤白旗と紋章パホーニャがベラルーシ人にとってのナショナル・シンボルとして掲げられた。1939年に西ベラルーシがソヴィエト・ベラルーシに統合された際も、西ベラルーシのベラルーシ人は白赤白旗とパホーニャの紋章をもって赤軍を迎えたといわれている。また、在外ベラルーシ人のディアスポラの間では一貫して白赤白旗とパホーニャの紋章がシンボルとして用いられた。

1941年6月にナチス・ドイツ軍が不可侵条約に反してソ連領に侵攻すると、ソヴィエト政権下にあったベラルーシの領域は8月末までに全面的にドイツの占領下に入った。このとき、1939年に西ベラルーシを追われベルリンに亡命していたベラルーシ人知識人たちはベラルーシに再び戻り、ナチス・ドイツ軍のプロパガンダや諜報活動に手を貸すかわらべベラルーシ語による出版活動や教育活動を行った。ナチス・ドイツ軍はこうしたベラルーシ人協力者たちの活動に際して、当初は白赤白旗と紋章パホーニャの使用についてはそれを許可するという姿勢であったが、やがて占領末期になるとヒトラーユーゲントをモデルに組織した「ベラルーシ青年同盟」(Саюз беларускай моладзі)の旗に白赤白旗のデザインを取り入れたり、1943年末に傀儡政権として組織した「ベラルーシ中央ラーダ」(Беларуская цэнтральная рада)の印章にパホーニャの紋章を採用するなど、積極的にそのシンボルを利用した。



写真6：ベラルーシ青年同盟の旗⁴



写真7：ベラルーシ中央ラーダの印章⁵

1944年夏、赤軍によってナチス・ドイツ軍の占領から解放されたベラルーシはその全域が再びソヴィエト政権下に戻るようになった。国旗及び国章は1950年代に入ってデザイン変更がなされ写真8、9のようになった。このとき採用された新たな国旗と国章は現在のベラルーシ共和国で採用されている国旗及び国章のルーツとなっている。一方、白赤白旗と紋章パホーニャは、引き続き欧州や北米の在外ベラルーシ人コミュニティの間でナショナル・シンボルとして掲げられ使用された。

⁴ Басаў А.Н., Куркоў І.М. Флагі Беларусі ўчора і сёння. Мінск. 1993. С.24.

⁵ Цітоў А.К. Наш сімвал – Пагоня: Шлях праз стагоддзі. Мінск.1993. С.40.



写真 8 (左) : 1951 年に採用されたベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の国旗⁶

写真 9 (右) : 1950 年に採用されたベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国の国章⁷



写真 10 (左) : ロンドンの在外ベラルーシ人の拠点である「聖キリルベラルーシ宗教文化センター (St Cyrils Belarusian Religious and Cultural Centre)」(筆者撮影)

写真 11 (右) : 「聖キリルベラルーシ宗教文化センター」の外壁に見られるパホーニャのレリーフ (筆者撮影)



写真 12 (左) : ロンドンの在外ベラルーシ人たちによって 1971 年に設立された「フランツィスク・スカリナ記念ロンドン・ベラルーシ図書館兼博物館 (Francis Skaryna Belarusian Library and Museum in London)」の一室 (筆者撮影)

写真 13 (右) : 「フランツィスク・スカリナ記念ロンドン・ベラルーシ図書館兼博物館」の窓辺に掲げられた白赤白旗と紋章パホーニャ (筆者撮影)

⁶ Басаў А.Н., Куркоў І.М. Флагі Беларусі ўчора і сёння. Мінск. 1993. С.24.

⁷ Цітоў А.К. Геральдыка Беларусі: Ад пачаткаў да канца XX стагоддзя. Мінск. 2010. С.134.

6. ソ連末期、ベラルーシ独立以降の状況

1980年代後半、ペレストロイカの時代になると、ソヴィエト・ベラルーシでは若者たちによる様々な歴史文化サークルの活動や1989年に結成されたベラルーシ人民戦線「復興」（*Беларускі народны фронт «Адраджэньне»*）、民主派の諸政党の活動の中で白赤白旗と紋章パホーニャをベラルーシのナショナル・シンボルとして復興しようとする機運が高まった。こうした中、1991年9月19日に「ベラルーシ共和国の国旗に関する法律」及び「ベラルーシ共和国の国章に関する法律」がベラルーシ共和国最高会議で採択され、白赤白旗は独立を果たしたベラルーシ共和国の国旗となり、紋章パホーニャは正式に国章として採用された。国章パホーニャは、ヤウヘン・クーリク（*Яўген Кулік*）、ウラジーミル・クルコーウスキ（*Уладзімір Крукоўскі*）、レウ・タルブージン（*Леў Талбузін*）という3名のグラフィック・デザイナーが図案を手掛けた。新たに国章用にデザインされたパホーニャは、赤い盾形に白馬に跨って剣を振りかざした騎士が描かれる伝統的なデザインを踏襲しつつ、騎士の左手にある盾に描かれる複十字を聖エフロシニャ・ポロツカヤ（エフラシンニャ・ポラツカヤ）の黄金の十字架に見立てたものとなった。

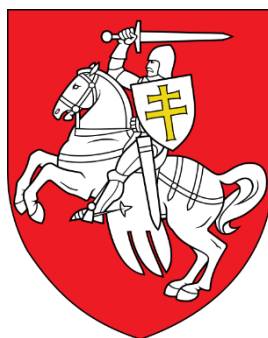


写真 14 (左) : 1991年にベラルーシ共和国の国旗に採用された白赤白旗⁸

写真 15 (右) : 1991年にベラルーシ共和国の国章に採用されたパホーニャの紋章

しかし、その後1994年にアレクサンドル・ルカシェンコ氏が大統領に就任すると白赤白旗と紋章パホーニャはそのベラルーシ共和国の国旗国章としての地位を脅かされることとなる。冒頭で紹介した服部倫卓氏の『不思議の国ベラルーシ』（岩波書店、2004年、18-19頁）に触れられているように、大統領に就任したルカシェンコ氏は白赤白旗およびパホーニャの紋章がかつてベラルーシを占領したナチス・ドイツ軍への協力者が掲げたものであることを非難し、1995年5月に実施した国民投票においてその変更を提案したのである。1995年の国民投票では、ロシア語に対して国家語の地位を付与することに賛成か、ロシア連邦との経済統合に賛成するかといった質問と合わせて、「あなたはベラルーシ共和国の新しい国

⁸ *Басаў А.Н., Куркоў І.М. Флагі Беларусі ўчора і сёння. Мінск. 1993. С.26.*

旗と国章の導入についての提案を支持しますか？」という質問が設けられた（新たな国旗国章として提案されたのは、写真 16、17 に示すように 1950 年代以降のソヴィエト・ベラルーシで用いられてきた国旗及び国章のデザインを踏襲したものであった）。この国民投票における国旗と国章に関する質問については、公式記録上 75.1%の投票者が賛成票を投じたとされ⁹、実際に「新たな」国旗と国章への変更が実施された。



写真 16 (左) : 1995 年に採用されたベラルーシ共和国の国旗

写真 17 (右) : 1991 年に採用されたベラルーシ共和国の国章¹⁰

この国旗・国章の変更は、それが民意に基づいた選択であるという体はとっていたものの、政権の姿勢を支持しがたい人々にとっては、ルカシェンコ政権が伝統的なベラルーシのナショナル・シンボルの意義を恣意的に貶めたことをとりわけ印象付ける出来事となった。この頃より白赤白旗と紋章パホーニャは明らかに「反体制」「反ルカシェンコ政権」というイデオロギーを帯びるものとなったといえる。

ベラルーシ国内では、1995 年以降、これまで 2006 年、2010 年の大統領選挙後の大規模な抗議活動に代表されるような様々な反体制派のデモにおいて、人々が団結の象徴として白赤白旗と紋章パホーニャを掲げてきた。ただし、同じく白赤白旗と紋章パホーニャを掲げて展開されている 2020 年の抗議活動は、その規模と抗議活動の継続期間という点で過去最大規模のものとなっている。白赤白旗と紋章パホーニャというベラルーシの 2 つのナショナル・シンボルは、本稿で概観したように、1991～1994 年の時期を除けば在外ベラルーシ人や国内の反体制派などベラルーシ人の中でもマイノリティの立場に置かれてきた人々によって受け継がれ維持されてきたものであった。現在、白赤白旗と紋章パホーニャはかつてないほどに多くのベラルーシ人を連帯させるシンボルとして機能している点は大いに注目される。今後ベラルーシの人々にとって 2 つのシンボルがどのような存在として再定義されていくのか、私たちは今まさにその大きな歴史の潮目を目にしているといえるのかもしれない。

⁹ <http://www.rec.gov.by/ru/arhiv-referendумы/respublikanskiy-referendum-14-maya-1995-goda> (2020 年 9 月 13 日閲覧)

¹⁰ Цімоў А.К. Геральдыка Беларусі: Ад пачаткаў да канца XX стагоддзя. Мінск. 2010. С.135.

参考文献

服部倫卓『不思議の国ベラルーシ』岩波書店、2004年

Ткачоў М.А. Беларуская нацыянальная сімволіка. // Энцыклапедыя гісторыі Беларусі. Т.1. / пад рэд. М.В. Біч і інш. Мінск. 1993. С.391-393.

Басаў А.Н., Куркоў І.М. Флагі Беларусі ўчора і сёння. Мінск. 1993.

Цітоў А.К. Наш сімвал – Пагоня: Шлях праз стагоддзі. Мінск.1993.

Цітоў А.К. Геральдыка Беларусі: Ад пачаткаў да канца XX стагоддзя. Мінск. 2010.

Рудак А. Мінчушчына і сучаснасць гістарычнай сімволікі. // Культура. №. 34 (1473). 22 - 29.08.2020г. [<http://kimpress.by/index.phtml?page=2&id=17412>] 2020年9月13日閲覧

Мікулевіч С. «Пагоня»: 10 фактаў пра нацыянальныя сімвалы. // Наша Ніва. 20.11.2016 [<https://m.nashaniva.by/articles/180334/>] 2020年9月13日閲覧